

# かけはし



ニュージーランドと一宮市の小学生が絵手紙の交換によって、自分の国を紹介し、お互いに理解しようとしていることをご存知ですか？

昨年から、ニュージーランドのクライストチャーチ市とインバカーギル市の小学校と、一宮市の中島小と大和東小の間で絵手紙交流が始まりました。

ニュージーランドとは、2005年「愛・地球博」の頃から、一宮市のフレンドシップ国としてのお付き合いですが、絵手紙交流を続け交流の輪を広げていきたいものです。（you都市）



# 水と芸術のまち トレビーゾの魅力たっぷり

## 記念講演



講師  
法政大学教授 陣内秀信氏

イタリア建築史の専門家・陣内秀信氏から見たトレビーゾの街の魅力と街づくりについて語っていただきました。(森)

「研究のため各地を訪ね、家の中に入り実測させてもらうこともあります。家に入れていただけるようなホスピタリティのある人が暮らしていること、外観が美しいこと、食べるものが美味しいことが重なっているのは偶然ではありません。文明の証です。トレビーゾもその一つです。一宮市長はよくこの街を見つけたと感心しています。」

「街づくりは、歴史的に見ることが重要です。トレビーゾは、ヴェネツィア都市を作り上げるのに重要な役割を持っていました。小麦・材木などの資源、火薬工場など作れる広い土地、またヴェネツィアへうまく水を流すための工夫がされていました。現在のトレビーゾは、それらを上手く活かした街づくりをしています。一宮市も一宮ならではの特色を歴史に見ながら街づくりをしてください。」 第二部講演より



## トレビーゾの特産品だよ



DIADORA/ディアドラ  
スポーツシューズ、ウェア

世界のトップアスリートも愛用。僕も速く走れるかな？

「まるやかな優しい口当たりが特徴」試してみなくっちゃ！



PROSECCO/プロセッコ  
トレビーゾ産スパークリングワイン



RADICCHIO/ラディッキオ  
トレビーゾ特産の赤チコリ

高級食材。でも僕にはちょっと苦いな！

ヨーロッパの街をこれに乗って走ってみたいな…



PINARELLO/ピナレロ  
自転車



豪華賞品にいちみんなビックリ！  
特産品関連グッズ抽選会





## 親子国際理解セミナー

# “世界の80%が途上国”

JICA中部、名古屋市科学館 1.19

毎年実施されているこのセミナー、今年は12組29人の親子が参加し、名古屋のJICA中部「なごや地球ひろば」で世界の国々について学び、名古屋市科学館では世界一大きいプラネタリウムで冬の星座を学びました。

JICA中部に到着すると、赤いジャンパーのスタッフに迎えられ、二階の研修室で世界の国々についてスライドやクイズで学習が始まりました。



世界には約190の国があり、その内の途上国数が80%もあるそうです。日本は先進国ですが、途上国には水道がなく、病気などにも感染しやすいなどの説明を聞くと、「本当?」「信じられない」と子どもたちから驚きの声があがります。また、私たちの

日常生活を支えている、コーヒー、バナナ、えび、スカート、カーテン、自転車、テレビなど、たくさんの食料や製品なども途上国から日本に輸入されていることを学びました。つづいて一階に移動し、途上国には、教育が受けられずに、文字が読めなかったり計算ができない子どもたちがたくさんいること、食糧は必要量の二倍も生産されているのに、12億人の人たちが十分な食事が取れていない現状などを、館内の展示資料やデータを交えながら説明を聞き、世界には恵まれない子どもたちが多いのに驚きました。

昼食は館内のエスニックカフェで、カリビアンチキンライスにスープとサラダを頂きました。めずらしい料理に子どもたちも“おいしい”と、ペロリと完食。



午後は、名古屋市科学館のプラネタリウムで、冬の星座オリオンの神話や銀河系宇宙、北極星と大接近中の木星の仕方など学びました。今日の親子セミナーは、宇宙と地球の両方を学んだ楽しい一日でした。(ドリアン)

# 国を越えての仲間づくり!!

## 国際スポーツ交流会

一宮市総合体育館 1.26

「私スポーツオンチです」、「ソフトバレー初めて」と言う中国人のギイさんは、知り合いと一緒にやって来た。今年のスポーツ交流会は、中国、ウズベキスタン、ベトナム、イタリアからの31人と、日本人58人で12チームに分かれて試合が始まった。この交流は、木曽川文化スポーツクラブのメンバーの協力があり、試合前の準備体操もクラブの子どもたちが行っていた。

初めは、おそろおそろボールに触っていた人も、慣れてくると打ち返す場面も。ビーと鳴る笛の合図で、ゲー

ムがスタートする。スパイクを打ってネットに引っかかる人、サーブの時にラインを踏んでミスを取られる人。

1つのルールで子どもも、大人も、日本人も、外国人も試合をする。未来の仲間づくりと、絆を感じさせた。優勝を決めたキウィーズチームは、みんなでガッツポーズ。

全ての試合が終わった後は、お茶とお菓子で疲れた体を癒す心地よい時間があり、大寒の中の、温かいひと時でした。(藤井)



# 歩いて、しゃべって、たっぷり食べた ふれあいうォーキング



木曾川庁舎周辺 11.2

外国人と一緒にウォーキングをして、交流を深めようという催しが、木曾川庁舎を起点に行われました。当日は薄曇りの上、風のない絶好のウォーキング日和で、外国人の参加者はウズベキスタンはじめブラジル、韓国、フィリピン、イギリス、ニュージーランド、イタリア、中国出身の人たち21名と日本人参加者31名およびボランティアスタッフ10名の総勢62名でした。



コースは木曾川庁舎を出て、川合玉堂生誕の碑、剣光寺、黒田城跡、山内一豊立志像を回り、途中6か所のチェックポイントでクイズに答えるというもの。距離は約5kmです。参加者は赤、緑、青、ピンク等6つのグループに分かれ、約1時間半一緒に歩くので、初めて会った人ともすぐ親しくなり、にぎやかなおしゃべりが絶えません。



私も赤グループで参加し、松本さん一家（5名）、韓国の大野さんとその友人の大崎さん、ウズベキスタンのベックさんと一緒でした。ベ

ックさんは母国の大学で4年間経済学を学び、今は名古屋大学の法学部に通っているそうです。1年半の日本の生活で、日常会話はひと通りできるし、かなり日本になじんでいるようでした。母国の宗教（イスラム教）の話や、それに伴う生活上の習慣、食べ物のことなどいろいろ話してくれました。また日本の神社と寺院の違いや、日本人が日常生活では無宗教であることなど不思議がって聞いてきました。卒業後もできれば日本に残りたいそうです。



ウォーキングのあとは外国人ボランティアによるバーベキューなどの昼食会です。ウズベキスタンはプロフとシャシリク、ブラジルはシュラスコ、韓国はトッポッキとチヂミ、フィリピンはギナタンハロハロでした。名前だけではちょっとわかりにくいので、機会があれば一度食べてください。私はピラフに似たプロフとギナタンハロハロがおいしかったですよ。

このウォーキングは日本語しかできない私でも十分楽しかったです。またこういう機会があればぜひ参加したいと思いました。

（文・橋本 写真・ドリアン）



# wai-wai-a フォトサロン



日本語ひろばびさいお楽しみ会



日本語ひろばポットラックパーティー



日本語ひろばジュニアクリスマス会



日本語ひろばは、在住する外国人に日本語を教えるボランティアグループです。イベントもいろいろ開催され、みなさん楽しく日本語を学んでいます。

## 日本語の教え方セミナー



外国人に日本語を教えるための知識や技能について教えてもらいました。

(文・日野 写真・佐野、伏原、永谷)

# “びさいまつりでつくったよ”

尾西第一中学校 10.27

今年のびさいまつり初日は、台風27号が日本列島に接近して野外行事が中止になりましたが、翌日は台風も通り過ぎ、朝からすっきり晴れ上がり秋のお祭り日和となりました。おまつり会場の尾西庁舎から尾西第一中学校までの市道は歩行者天国となって、歩道には屋台がならび、大勢の子どもや大人で賑わいを見せました。

国際交流協会のブースは、尾西第一中学校の校庭西側にテントが張られ、協会のブルーの旗がはためいています。

午前中の催しは、イタリア生まれの“ピノッキオ人形”づくりです。参加者にはお菓子のプレゼントがもらえることもあってか、大入り満員、順番待ちの人がでるほどの大人気でした。国際交流員のイタリア人ヴァレンティーナさんも大忙し。ボランティアの人たちと一緒に、小さな子どもたちのピノッキオづくりを手助けします。



イベントは、大勢の参加者で途切れることなくお昼過ぎまで続き、うれしいことですが途中で景品のお菓子がなくなってしまうました。童話の世界のピノッキオは、いつの時代でも子どもたちの心をしっかりとつかんでいます。



作り終わると国際交流員とボランティアさんへ、覚えてたのイタリア語で、グラッツィエ（ありがとう）とニコリ笑顔でお礼を言っていました。



午後からニュージーランドコーナーに切り替わり、“キーウィ編みのランチョンマット”づくりです。キーウィといえは、フルーツのキウィを思い浮かべますが、ここでつくるのはニュージーランドにいる、飛べない鳥“キーウィ”デザインのランチョンマットです。この写真のように、キーウィの型紙にテープを格子状に編み込んでゆきます。いろいろなカラーテープを使って、自分専用のキーウィランチョンマットが完成すると樹脂でラミネートしてもらって出来上がります。



参加者はこどもたち同士、親子で参加する方々など様々です。ランチョンマットを作りながら、ニュージーランドからの国際交流員ジャックリンさんとお話したり、一緒に写真を撮ったり、子どもたちも大人も一緒に楽しんでいました。終わると「おもしろかった」、「たのしかった」とプレゼントと自分がつくったキーウィランチョンマットをもらって笑顔でブースを後にして行きました。

台風が去って穏やかに晴れたびさいまつりの協会ブースは、爽やかな国際交流の時間がゆっくりと流れていました。

(ドリアン)



## NORIKO学級とリシタン

羽根渕 桂

私は、昨年5月から9月までウズベキスタンへ日本語ボランティアに行きました。そのボランティア教室は日本人の大崎さんという方が1999年に建て、奥さんの名前から『NORIKO学級』と名付けました。NORIKO学級はウズベキスタンの東、キルギスとの国境に接している小さな町リシタンにあります。

ここには6歳から15歳くらいまでの子どもたちが勉強に来ます。初めは友達がいるから…などという単純な理由ですが、通ううちにここに来た日本人と話したい、日本の事をもっと知りたい、という気持ちが強くなり、頑張っ



勉強方法は、先生が言ったひらがなやカタカナ、漢字を黒板に書いて競争したり、かるたやすごろく、折り紙などの遊びから言葉を覚えたりしています。テストをすると100点が取れるまで何度も挑戦しがります。勉強以外では毎日、取っ組み



合いのケンカをしては泣いたり、男の子は女の子に口喧嘩で負けたりますが、すぐ仲直り。毎日元気です。

羽根渕 桂さん：日本語ひろばジュニアで外国の子どもたちに日本語を教える協会のボランティアの方です。今回、遠くウズベキスタンのリシタンという町で、日本語を教えているという現場をご自身で見、感じ、触れ合うことを体験されてきました。(you都市)

週末は子どもたちと学校のグラウンドでサッカーをしたり、木陰で卓球をしたり、市場へ行ってシャシリク(肉の串焼き)やソフトクリームを食べたりしました。

5月の終わりには卒業式があり、9月の始業式まで3か月も夏休みです。宿題もありません。だからNORIKO学級は大盛況です。一日中子どもたちが来る来る！毎日新しい子どもが増え、皆が「先生！」と呼ぶのでくるくる目が回りそうでした。少し日本語が分かる子どもにも手伝ってもらい、どうにか一日が終わる…という日々を過ごしました。そんな中で、子どもたちの日々の成長を感じることができ、子どもたちと多くの素敵な時間を過ごせたことはとても貴重な体験でした。

ところでウズベキスタンはどんな国だと思いませんか？ウズベキスタンの人はとても親日家で日本人に優しい人が多いです。時々、日本人ですか？と聞かれ、日本人です。と答えると「一緒に写真を撮ってください」と言われたり、笑顔で握手してきたり、とても喜んでくれます。



特に私の滞在していたリシタンは、NORIKO学級がある影響で、歩いていると子どもから大人まで誰もが「こんにちは」と日本語で挨拶してくれます。そんな素敵な町がウズベキスタンにはあります。

この町を訪れる日本人には、子どもたちの笑顔がまた見たいというリピーターの方や、バックパッカー、日本で学校の先生をしている人など様々です。

また、ここは陶器が有名です。NORIKO学級の隣に工房があります。すべて手作りで、青の釉薬が昔から受け継がれている貴重なものだと聞きました。

本当にとても魅力的なウズベキスタンを是非一度訪れてみてください。その時はNORIKO学級と陶器の町、リシタンも忘れずに！





# おとなりさん



私は李微（リウェイ）といいます。「かけはし」65号の「地球あっちこっち」に出していただいた加藤の妻です。出身は中国黒竜江省ハルビン市で、日本へ来て7年目です。6年前に結婚し、1歳の長男と3人家族です。住まいは夫の両親が暮らす家の隣で、実の親子のように親しくしてもらっています。

中国では小学校の教師をしており、一宮の中学校の先生をしている主人とは共通の友人を通じて知り合いました。主人は優しい人です。ただ日本の先生は家に帰ってきても仕事をしているので驚いています。

食べ物は、刺身、納豆、寿司とたいていの和食なら何でも好きです。そのほかに韓国製ジャガイモラーメンもおいしいですよ。おやつはひまわりのタネをよく食べます。これは中国人のおやつ

定番です。

一宮はハルビンに比べて清潔で静かな町ですね。私のまちは人口が多いせいか人が満ちあふれています。ただ日本の北海道の稚内と同じくらいの緯度にあり、冬はマイナス20度以下になり、雪が多いです。そのせいか夏になると毎日お祭り気分



みんな集まってはワイワイやっています。

夢は、もう少し日本語を勉強して、日本にいる中国の人たちに日本語を教えることですね。

（文・橋本、小川）

## 世界のあそびシリーズ

### マダガスカル編

一宮市在住の野田直人さんが、JICAのプロジェクトで専門家として、マダガスカルの田舎に行っていた時、マダガスカル人のスタッフに、子どもの遊びについて聞いてもらいました。

マダガスカルの田舎の子どもたちに市販のおもちゃは手が出ず、あるものを工夫して遊びます。女の子ならロープを使って縄跳び、男の子なら空き缶や木切れで車を作ったりしているそうです。写真の女の子たちは、石を集めて何かままごとのようなことをしているようです。

「日本の子どもが遊ぶような集団のルールに基づくような遊びは、田舎ではあまりないように思います。」と、野田さんは言っていました。（日野）



## 編集後記

「暇をつぶすなんて、もったいない！」『かけはし』の新年会で、話題が定年後の余暇の過ごし方になったときに、お酒片手に出てきた言葉です。残り少ない人生、ただ暇をつぶすためというだけで目的意識もなくなんとなんとか行動しては時間がもったいない。世のため、人のため、自分のために行動しようということらしいです。世のため、人のためには難しいけれど、忙しいを言い訳にせず、まずは自分のためになる活動がしたいなと思いました。（ミルクチョコ）

発行 2014年3月 編集 一宮市国際交流協会 〒493-8511 一宮市木曾川町内割田一の通り27番地 TEL0586-84-0014  
※2014年5月7日に事務局を移転します。〔新住所〕 〒491-8501 一宮市本町2-5-6 TEL0586-85-7076

この「かけはし」は、協会ボランティアにより取材、編集されています。  
協会に関する情報は、ホームページをご覧ください。【HPアドレス <http://www.iia-138.jp/>】  
ご意見・ご感想などお待ちしております。【メール [iia-138@iia-138.jp](mailto:iia-138@iia-138.jp)】  
Facebookページもご覧ください。【Fb <https://www.facebook.com/iia138/>】